

數十年の間朝廷の故實に練し、大臣大將に昇りて懸車の齡まで仕奉らる、親王の女祇子の女王は宇治の關白の室なり、よりてこの大臣をばかの關白の子にし給ひて、藤氏に變らず春日の社にも交るり仕奉られけりとぞ、またやがて御堂道の息女に相嫁せられしかば、子孫も皆かの外孫なり、この故に御堂宇治をば遠祖の如くに思へり、それよりこのかた、和漢の稽古を旨とし、報國の忠節をさきとする誠あるによりてや、この一流のみ絶えずして十餘代に及べり、

〔中右記〕大治五年二月廿一日甲午、立女御從三位藤聖子爲中宮崇徳、關白忠通當時執柄女、長女、母從三位藤宗子、故大納言宗通卿女也、當時執柄之女子立后、永承六年四條宮藤原賴通女之後、八十年間久絶之處、今度初有事、誠是藤氏之中興時歟、大宮右大臣殿宗通俊家之末葉、皇后初立給、一家光美後代之美談也、

〔續世繼二葉〕當代倉高は、一院白河の御子、御母皇后宮滋子ときこえさせ給、贈左大臣、平時信のおとゞの御むすめ也、略中いま又たひらのうちの國母清盛女徳子かくさかえさせ給うへに、おなじうちのかんだちめ殿上人、このゑづかさなどおほくきこえたまふ、このうちのゑかるべくさかえ給とき、のいたれるなるべし、たひらのうちのはじめは、ひとつにおはしましければ、にきの家どよのかためにおはするすぢとは久しくかはりて、かたゞきこえ給を、いづかたもおなじ御よに、みかどさきさきおなじ氏にさかえさせ給める、平野はあまたのいへのうち神にておはすかれど、御名もとりわきてこの神がきのさかえ給ふときなるべし、

〔諸家知譜拙記二〕高倉近代稱藪  
範季 高倉祖 順徳院外祖

刑部卿從三位、元久二年薨、贈左大臣從一位、

〔増鏡五〕内野の雪い、ま后藤原の御父は、さきにも聞えつる右大臣實のおとゞ、その父殿公の